

## 思うは招く

寺尾 信子  
(昭和46年入学)



2021年11月初旬、北山恒さんから「東京人(2021.12 / No.447)」を送って頂いた。1971年入学の同級生である氏からは、横国大教授・法政大教授へと研究の場を移された後も時

折、著書をお送り頂き、都度、多くのことを学ばせて頂いている。「テーマ『コモンズを再生する東京』に『阿佐谷パールセンター』のことも扱っているので・・・」との添え書き、「・・・巨大資本が蹂躞する都市を生活者のものに変換させたいと思っていますが、資本主義が終焉するだろう百年後くらいにはそれが選択されるのかも・・・」との追伸・・・。エッ？百年後？？と少し驚いた。

北山氏は法政大学「江戸東京研究センター」を陣内秀信氏（現・法政大名誉教授、杉並区在住）と共に立ち上げ「近未来東京研究」をテーマに5年間研究され、活動成果を彰国社「未来都市はムラに近似する」にまとめておられる。2020年に「『紐（ひも）マップ』でコモンズ再生を示す」という商店街研究が行われ、「東京人」に特集記事が掲載された。杉並在住の陣内先生の紹介で北山さんは阿佐谷パールセンターを数回取材されたとのことであった。

「・・・東京にいくつかあるムラの気配のある地域・・・」と北山さんが評する通り、私の所属する「JIA（日本建築家協会）杉並地域会」という組織も2003年から地域活動を行っており、陣内先生にも会員として地域をテーマに講演をお願いしていた。徒歩や自転車でメンバー

が集まるボランティアな活動が20年近く続き、最近では、横国大OB（2003年卒）の利光収（としみつ・おさむ）さんと出会った。氏は現在、会の副代表を、私は地域行事・土曜学校の第4期校長を務めている。社会人が地域で繋がるという「近未来的なライフスタイル」は既に当たり前のものとなっていた。

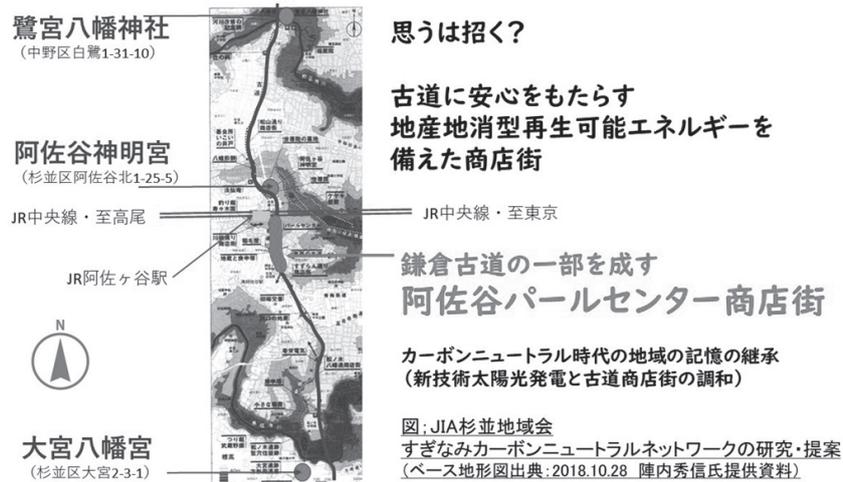
とは言え、コロナ禍がもたらした生活の変化は、誰も想像できなかった激変とも言えるものである。

- ・近居の娘夫婦が揃って在宅勤務、感染者数減少後も、平日の全日通勤は無い。
- ・平日も街に働き盛り世代の姿が多い。
- ・業務や会議のオンライン化。

オンライン化の浸透により情報共有のスタイルは大きく変わった。私がJIA本部行事の企画チームとして携わっているWEBセミナー「JIA2050カーボンニュートラル連続セミナー」は2021年7～12月の参加者が平均425名/回、9回の延べ参加者は3,800名を超えた。同種の会場開催行事は40～50名規模が多かったが、WEB方式に変わってから、様相が一変。会員・会員外、若い人からベテランまで、全国津々浦々から約10倍の人が自社や自宅から気軽に参加できるスタイルになった。

北山恒さんの「東京人No.447」に戻ると、そこには「コロナ禍という社会の裂け目から見た未来」「15minutes city という都市ビジョン」「商店街を中心とする生活圏」・・・などがつづられていた。都市部の多数の商店街は、線状の公共空間を地域に提供している。法政大学大学院チームの製作による紐マップ※は圧巻である。（※都内の商店街を地図にプロット、商店街の徒歩圏を約600mとすると、23区はほぼすべてカバーする、との注釈。）

例として阿佐谷パールセンター商店街は700m長さの車両の入らないアーケード付き歩行者空間。通勤者が自宅のある商店街に近い生活



圏に戻ってきたとき、今まで想像しなかった新生活スタイルが生まれることは容易に想像できる。

話題をJIA関東甲信越支部・杉並地域会に移すと、代表・石井祐樹さんと副代表・利光収さんは、私の長男・長女と同世代の1978～80年生まれ。そのお二人と共に地域行事・土曜学校を議論を重ねながら楽しく企画・運営している。2020年から4回の企画を実施した。2021年テーマは「すぎなみ2050カーボンニュートル時代のまちづくり」。2008年発足の土曜学校は、区民・行政・専門家の連携をモットーにまちづくりに様々な情報を発信しようとしている。

2020年の国の2050カーボンニュートル宣言以後、メディアに頻繁に登場する「脱炭素社会」で避けては通れない「再生可能エネルギー(以下、再エネ)」獲得の話題。とりわけ、太陽光発電(以下、PV)については、景観や廃棄時の問題、高い海外製品依存度など種々の課題はあるものの、現況、最有力の再エネと考えられている。これまで「低炭素のまちづくり」に取り組んでいた人々が「脱炭素のまちづくり」を語ろうとするとき、PV以外の分野も視野に入れた上で、全員が各自の「再エネ獲得ビジョン」を語ることは基本中の基本である。2021年、JIAの中でアンケートをとる機会があり、PV義務化の話題にとりわけ大きな抵抗感があることを実感した。その後11月の土曜学校で、景観に

美しく調和する欧州の事例を多数紹介したところ、話題の方向性が変わってきたと感じている。PVはむしろ都市部の景観の中にこそ、美しく溶け込むものとして開発・提案してゆくべきではないか、もっとポジティブな提案をしてゆこうという気運に杉並地域会も変わってきている。区内は「古道」を含む道・幹線道路、鉄道用地、河川などが東西と南北に縦糸・横糸のように織りなした地勢である。これらは地産地消型再エネのネットワークを形成するのに極めて有望な線状空間である。鎌倉古道の一部として今は立派な商店街になっている阿佐谷パールセンターも、有望な候補である。将来実用化が期待されている軽量・採光型・可撓(かとう)型の新技術のPVが搭載されれば、地産地消型再エネが地域の「古道」に安心をもたらす。

「思うは招く」・・・描いたことが実現することは案外、予定より早いかもしれない。そんな楽観的な考えを持ちながら、年代を超えた絆で、地域の生活圏から脱炭素まちづくりの発信を続けてゆきたいと考えているところである。

(株) 寺尾三上建築事務所 代表取締役  
1971年入学、1975年学部卒・1977年大学院修士課程修了  
公益社団法人日本建築家協会  
JIAカーボンニュートル特別委員会委員  
JIA環境会議・JIA杉並地域会所属